鎌倉お宿のあやかし花嫁3

～時を超えた想いと永遠の誓い～

小春りん Lin Koharu

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

目次

チェックイン……5
一泊目　銭拾いの伝説と訪問者……6
二泊目　思わぬ依頼とすれ違い……33
三泊目　いなり寿司と星月夜……47
四泊目　特別授業と般若（はんにゃ）の面……65
五泊目　孤独な鬼が語る真相……95
六泊目　別れの手紙と残された家……117
七泊目　再会と烏天狗（からすてんぐ）族の長（おさ）……141
八泊目　約束と新しい未来……164
九泊目　鎌倉お宿のあやかし花嫁……190
チェックアウト……210
延泊　幸せをくれた君へ……215

チェックイン

「お前にもいつか、心から愛する者ができればわかるさ」

ゆらゆらゆら。体が温かいなにかに包まれながら、揺られている。

誰かの涙が落ちるとき、別の場所でも誰かが涙を流していた。

「どうか、俺のいない場所で幸せに暮らしてほしい」

声の主はそう言うと、右手の小指にそっと触れる。

そうして伸びていた見えない糸を、自らの手で静かに切った――

一泊目　銭拾いの伝説と訪問者

十一月。冬の気配をまとった風が、金色の陽射しを運ぶ。
赤や黄に染まった葉は視界を彩り、鎌倉を秋色に染めていた。
「紗和、本日宿泊予定のお客様のお食事の件、調理場には伝えてくれたかい？」
太陽が空高く昇るころ。玄関の掃き掃除をしていた北条紗和は、仲居頭の阿波に声をかけられた。
「朝のうちに伝えるように言ってあったね」
ピタリと動きを止めた紗和の顔は青ざめ、背中には冷や汗が伝う。
（しまった。すっかり忘れてた）
「もしかして、まだ伝えていないんじゃ……」
「すみませんっ、すぐに行ってきます！」
先回りをして頭を下げた紗和は、箒を脇に置くと急ぎ足で調理場に向かった。
――ここは鎌倉にある、あやかし専門の幽れ宿・吾妻亭。
いろいろあって無職の家無しになった紗和は、約半年前から吾妻亭で住み込みの仲

居として働いている。
加えて今は、女将修業にも励んでいるのだが……
そもそも人である紗和が、なぜ、あやかし専門の宿で働くことになったのか。
それは、紗和が生まれつきあやかしが視える〝視える人〟で、子供のころに吾妻亭の主人である常盤と、結婚の約束をしたことが発端だった。
常盤は紗和と結婚の約束をしたあと、約十七年にわたって、紗和だけを一途に想い続けてきた。
その愛の重さたるや超重量級で、自身の式神を侍らせて、ストーカーまがいのことをしていたほど。
ところが紗和は、少し前まで結婚の約束はおろか、常盤の存在すら忘れていた。
大切な思い出なのに、どうして忘れていたのかはわからない。
けれど再会した常盤と過ごすうちに、すべてを思い出すことができた。
そうして常盤と心を通わせた紗和は、彼の花嫁として吾妻亭の女将になる決意を固めたのだ。
ちなみに紗和には、〝あやかし〟以外にも、特別に視えるものがある。
紗和は生まれつき共感覚が強くて、相手の本質を〝色〟で視ることができた。
一時は、その力を疎ましく思って嫌厭していた。

しかし吾妻亭で過ごすうちに受け入れ、今ではその力を用いながらよき花嫁かつ、よき女将になろうと日々励んでいるのだが……

（ああ、また失敗しちゃった）

吾妻亭の廊下を歩く紗和の足取りは重い。

肩を落としたまま中庭の前を通り過ぎようとしたら、正面から情熱的な深紅のオーラをまとった美女がやってきた。

「あら。紗和ってば、辛気臭い顔をしてるわねぇ」

いきなり毒舌を炸裂させた彼女の名前は、稲女という。もともとは紗和の仕事上の先輩で、吾妻亭で働く仲居のひとりだ。

「どうせまた、バカな粗相をしたんでしょう」

「……稲女さん、私がなにか失敗するたびに、生き生きしてませんか？」

紗和が思わずむくれると、稲女は楽しそうにクスクス笑った。

「だって紗和が修業に挫折したら、アタシに女将のお鉢が回ってくるかもしれないじゃない？」

そう言う稲女はあやかしで、首が伸びない代わりに頭が取れるという、珍しいろくろ首だ。

見た目は長い黒髪が似合う女性だが、じつは心が乙女な男性だったりする。

吾妻亭で働く者は主人の常盤を筆頭に、それぞれ複雑な事情を抱えた、わけありのあやかしたちばかりなのだ。

「ちょっと。なにか言い返しなさいよ」

「すみません……なんだか、言い返す気力がなくて」

首をすくめる紗和を見た稲女は、呆れたような息を吐いた。

「もう、本当に辛気臭いわねぇ。女将に一番大事なのは、元気と笑顔でしょうに。まさかアタシの言葉を真に受けてはいないわよね？」

勘のいい稲女には、いつだって紗和の気持ちはお見通しだ。

今だって、稲女は紗和を励まそうと軽口を叩いただけだと、紗和も気づいていた。

「もちろん、わかってます。稲女さん、いつもありがとうございます」

答えた紗和は、曖昧な笑みを浮かべる。

すると今度は後方から、野菜が入った段ボール箱を抱えた、背の高い青年がやってきた。

「おっ、さわっぺに稲女さん。ここでなにしてるの～？」

料理人見習いの義三郎だ。

義三郎は琥珀色の短髪に琥珀色の瞳を持つ、爽やかで明朗闊達な好青年。

〝空を飛べない烏天狗〟で、吾妻亭の花板・仙宗の愛弟子として調理場で働いていた。

「あっ、サブくん、ちょうどよかった！　これから、お客様の食事について伝えるために、調理場に行くところだったの」
紗和は目的を果たすため、着物の襟に挟んでおいた小さなメモを取り出した。
メモには宿泊客の苦手な食材や、朝食の有無が書いてある。朝のうちに宿帳を見て、書き写しておいたのだ。
（本当は、朝一番に調理場に伝えに行かなきゃいけなかったのに）
別の用事に気をとられて、阿波に指摘されるまで、すっかり頭から抜け落ちていた。
「ええと、本日宿泊予定のお客様なんだけど……」
「あっ、それならもう大丈夫～！」
「え？」
「じつは朝一で、小牧さんが伝えに来てくれたんだ」
メモを読み上げようとした紗和を止めた義三郎は、ニッコリと微笑んだ。
小牧は猫又のあやかしで、吾妻亭の主人である常盤の右腕的存在だ。
「今日は、特に食事にこだわりのあるお客様が多いから、気を遣って早めに伝えに来てくれたみたいでさ」
「そ、そう……なんだ？」
「うん。親方も把握済みだし、おかげで下準備が早めにできたから助かったよ～」

義三郎が言う親方とは、花板の仙宗のこと。
話を聞いた紗和は、思わず力が抜けてしまった。
（きっと小牧さんは私がミスするのを見越して、フォローしてくれたんだ）
考えたら情けなくなり、自然と視線が落ちてしまう。
すると紗和の気持ちを察した稲女が、義三郎の頭をペチン！　と叩いた。
「いてっ！」
「ちょっと、サブ！　あんた、もう少し気の利いた言い方できないの⁉」
「えっ⁉　オレ、なにかマズイこと言いました⁉」
突然頭を叩かれた義三郎は、目を白黒させている。
紗和は呆然と立ち尽くしたまま、ふたりの声をどこか遠くで聞いていた。
阿波の指導のもと、女将修業を始めて早二ヶ月。
最初は前向きな気持ちで取り組めていたが、今では落ち込む時間のほうが長くなっている。
女将の仕事は想像以上に多岐にわたり、細やかな気配りと迅速な判断が求められる。
覚えることも多く、紗和は毎日の業務をこなすことに精いっぱいで、そのうち小さなミスを重ねるようになった。
（まるで、先の見えない山道を登っているみたい）

最近では、〝いつか取り返しのつかない大きな失敗をするのではないか〟と、悪いことばかり考えてしまっていた。
「私……本当に女将になれるんでしょうか」
つい口から弱音がこぼれた。
すると俯く紗和を包み込むように、温かな気配が背後に立った。
「紗和ならなれるさ。俺が保証しよう」
次の瞬間、甘い囁きが耳をかすめた。
驚いて振り向くと、そこには今日も絶世の美男たる常盤が立っていた。
「あ、朝から会合に出掛けていたはずじゃ……？」
戻りは夜になると聞かされていたのに、どうしてここに常盤がいるのだろう。
紗和が目を丸くしながら尋ねると、常盤は紅く濡れた瞳を細めて、柔らかく微笑んだ。
「一秒でも早く紗和に会いたくて、問題を早急に片付けて帰ってきたんだ」
さらりと答えた常盤の額には、黒く短い角が二本生えている。
紺無地の着流しが似合う端整な顔立ちに、紅いハイライトが入った艶のある黒髪。
言葉に負けず劣らずの甘い笑みを向けられた紗和の胸は、トクンと跳ねたが……
それも一瞬で、紗和はすぐにまた視線を伏せた。
「おかえりなさい、お疲れ様でした」

明らかに落ち込んでいる様子の紗和に目を留めた常盤は、「ただいま」と優しく答えてから静かに微笑む。
「なぁ、紗和。提案があるんだが」
「提案？」
「ああ。今日は予定が早く片付いたから、午後は時間ができたんだ。よかったら、これからふたりで鎌倉の街に繰り出さないか？」
反射的に視線を上げた紗和と、常盤の穏やかな眼差しが重なる。
「ここのところ、働き詰めだっただろう？　だから、たまには気晴らしでもしよう」
思いがけない誘いに、紗和は心を揺さぶられた。
女将修業を始めてから、紗和はほぼ無休で働き詰めだった。
人の何倍も働かないと、いつまで経っても立派な女将になれない気がしていたのだ。
（それだけしても、まだミスをしてしまうくらいだし）
そっと目を閉じた紗和は、静かに首を左右に振った。
「私は、やらなきゃいけない仕事があるから――」
行けないと、誘いを断るつもりだった。
だけど紗和の言葉を、そばにいた稲女がバッサリ切った。
「行ってくればいいじゃない」

「え？」
「常盤様の言う通り、紗和はこの二ヶ月、休みも取らずによく頑張っていたわよ」
稲女は綺麗な笑みを浮かべて、紗和の頭をぽんと撫でる。
「阿波さんもね、口では厳しく言うけど心配してたわ。でも、紗和が頑張りたいって言ってるのに、こちらからやめろって言うのも変でしょう。だからアタシたちも、紗和が休みたいって言うまで見守るつもりだったけど、このままじゃ一生働き続けそうなんだもの」
口調には呆れが交じっていたが、稲女も紗和を心配していることが伝わってきた。
「いい機会だし、常盤様とふたりで出掛けていらっしゃい」
「で、でも、これからお客様のチェックインの時間で忙しくなりますし」
「そんなの、アタシたちがどうにでもできるわよ」
「そうだよ。いざとなったら、オレが仲居をやってもいいし～！」
軽口で参戦した義三郎を、稲女がジロリと睨んだ。
「あら、いい案ねぇ。それじゃあ紗和が不在の間は、サブに頑張ってもらいましょうか」
「ハ、ハハ、冗談でしょ稲女さん～。そもそもオレのサイズに合う仲居着ないし～」
「探せばどこかにあるわよぉ。阿波さんと一緒に、鍛え直してあげるわ」
カラカラと笑い合うふたりとは対照的に、紗和の胸中は複雑だ。

自分が抜ければ従業員たちに迷惑がかかるかもしれない。
と、悩ましげに落とされた肩に、常盤の大きな手がのった。
「信頼できる従業員に仕事を任せることも、女将（おかみ）の仕事のひとつじゃないか？」
ハッと息を呑んだ紗和は、常盤を静かに見上げる。
（従業員に仕事を任せることも、女将（おかみ）の仕事のひとつ……）
常盤の言葉を心の中で反すうすると、頷く代わりに唇をきゅっと引き結んだ。
「まさか、紗和はアタシたちを信頼していないなんて言わないわよね？」
「なっ、信頼してるに決まってます！」
即答すると、稲女がしてやったりといった顔をする。
「あら。それならもう、なにも悩む必要ないじゃない」
うまくのせられたと気づいても、もう遅い。続く反論は思い浮かばなかった。
「紗和、大丈夫だよ」
穏やかなのに力強い常盤の声が、最後のひと押しをしてくれる。
吾妻亭の従業員たちは、紗和が抜けても十分に務めを果たしてくれるだろう。
このまま無理に働き続けてミスを重ねるよりも、皆を信頼して一旦気持ちを切り替えることが、今の紗和には必要なこと。
「常盤……それに稲女さん、サブくんも、どうもありがとう」

ようやく心を決めた紗和は、三人に向かって頭を下げる。
「それじゃあ、お言葉に甘えて、少しだけ出掛けてきてもいいですか？」
顔を上げて微笑むと、稲女と義三郎は嬉しそうに頷いた。
「行ってきなさい。阿波さんも絶対にそうしろって言うはずだから」
「うんうん。親方も小牧さんも、さわっぺのためなら喜んで協力してくれるよ！」
頼もしい言葉に、紗和の目の奥が熱くなる。
もう一度隣に目を向けると、常盤は幸せそうに紗和だけを見つめていた。

＊　＊　＊

「平日だけど、さすがに混んでるね」
出掛ける準備をした紗和は、常盤と共に早速鎌倉現世の街へと向かった。
ふたりが降り立った街はちょうど紅葉が見頃を迎えた時季で、平日にもかかわらず観光客でにぎわっていた。
小町通りには、食べ物の香ばしい匂いと人々のざわめきが入り交じり、秋の空気をいっそう色づけている。
「紗和、はぐれないように手を繋いでいよう」

そう言うと常盤はそっと紗和の手を取った。
その瞬間、そばにいた女性のグループが色めき立つ。
本来、あやかしである常盤の姿は、普通の人には〝視（み）る〟ことができない。
しかし、一部のあやかしは〝視（み）えない人〟にも視（み）えるように化けられるのだ。
今の常盤も角（つの）を隠して、完全に人に化けている状態だった。
（前に、一緒にパンケーキを食べに行ったときにも、常盤は注目を浴びていたけれど）
そのとき常盤は洋装だった。これはあくまで紗和の主観だが、和服こそ常盤の色気を最も引き立てる装いだ。
また二人組の女性が、常盤を見るなり頬を染めて通り過ぎていく。
この様子では、どこを歩いても人目を引くのは避けられない。
けれど当人は周りの視線など意にも介さず、相も変わらず紗和だけを情熱的に見つめていた。
「紗和は、どこか行きたいところはあるか？」
常盤はただ、紗和とふたりで出掛けられたのが嬉しくてたまらないのだ。
ニコニコと笑う常盤を見ていたら、自然と紗和の肩からも力が抜けて、笑みがこぼれた。
「私は……できれば喧騒を離れて、心を落ち着けられる場所に行きたいな」

この時季の鎌倉で、そんな場所を見つけるのは難しいかもしれない。
それでも常盤なら、どんな無茶な願いでも叶えてくれる。紗和はそう信じていた。
「わかった。それなら少し歩くけど、いい場所がある」
案の定、常盤は頷くと、すぐに紗和の手を引いて歩き出した。
紅葉の名所を横目に、人の流れとは逆方向へ進んでいく。
紗和の願いを聞き入れた常盤が向かったのは、小町大路だった。
小町大路は、鶴岡八幡宮の参道である若宮大路の東側に並行する道だ。
「ここを真っすぐ進めば、材木座まで出られる」
常盤の説明を聞きながら、紗和は目の前に延びた道の先に目を向けた。
ここだけ時間がゆっくりと流れているようで、心が和らぐ。
地元の人々が行き交うその場所には、趣のある塀や木立が残されていて、どこか懐かしさが漂っていた。
「もしかすると、子供のころにもここを歩いたことがあるのかも」
今は亡き両親と一緒に。
記憶の糸を手繰ろうとする紗和の横顔を、常盤は穏やかな表情で見つめていた。
「ここから歩いて材木座まで行くの？」
「いや。俺が紗和を連れていきたい場所は、その脇道を入った先にある」

そうして紗和は常盤の案内で、小町大路にある脇道を曲がった。
ふたりは住宅街に延びた道を、ひたすら真っすぐに進んでいく。
しばらくすると石碑のようなものが見え、小さな橋に到着した。
橋のそばで足を止めた常盤を、紗和が仰ぎ見る。
「もしかして、ここが目的の場所？」
紗和の問いに、常盤は小さく頷いた。
常盤が紗和を連れてきた場所。それは鎌倉にある、東勝寺橋だった。
東勝寺橋は滑川に架かる、美しいアーチ橋だ。橋を渡った先には、北条一族が最期を迎えた東勝寺跡があり、歴史的にも重要な場所となっている。
「ここならゆっくりと、紗和にも紅葉を楽しんでもらえるかと思ったんだ」
説明し終えた常盤は、ふたたび静かに歩き出す。
喧騒を離れて、心を落ち着けられる場所に行きたい――
紗和の希望通り、周囲に観光客らしき人は見当たらなかった。
常盤を追って橋の上に立てば、爽やかな秋風が頬を撫でる。橋の上から見た滑川の両脇は赤や黄に染まっていて、静かな水面には紅葉筏が流れていた。
時折ひらひらと落ちる葉が、季節の移ろいを感じさせる。
「すごく静かで素敵な場所ね」

感嘆した紗和は美しい景色に見惚れながら、ホッと息を吐いた。
「橋の下に下りることもできるが、どうする？」
常盤が視線を向けた先には、水辺に続く道があった。そこから下へ下りれば、アーチ型の橋を別角度から見ることもできるらしい。
（ぜひ、それも見てみたいけど……）
今は十一月。興味はあったが、川の水は冷たいだろうし、転びでもしたら大変だ。
少し考えてから、紗和は小さく首を横に振った。
「次の機会に取っておいてもいい？」
そっと微笑むと、常盤は「もちろんだ」と答えて頷いた。
「次は、夏に来るのもいいかもしれないな」
秋の紅葉も素晴らしいが、新緑に包まれた東勝寺橋からの風景も、また違った魅力があるに違いない。川のそばも、きっと涼しくて気持ちがいいだろう。
（言葉にしなくても、常盤は私の想いを酌んでくれる）
胸の奥が熱くなった紗和は、常盤と繋いだ手に力を込めた。
そして温もりを確かめるように、常盤の腕に体を寄せてから口を開く。
「……最近、すごく不安だったの」
ぽつりぽつりと話し始めた紗和の手を、常盤は無言のまま握り返した。

「私に、吾妻亭の女将が務まるのか……。やっぱり私は、常盤の花嫁に相応しくないんじゃないかって。ふとしたときに、考えてた」
紗和の視線は、ゆるやかに流れる水面へと落ちていった。
常盤は、特別なあやかしだ。鬼の父と妖狐の母を持つ邪血妖でありながら、純血妖と同等か、それ以上に強い妖力を持っている。
邪血妖は、愛を知ると妖力が覚醒する。そのため常盤は幼いころ、紗和に恋をしたことで、強大な妖力が覚醒したのだった。
「常盤はこれまで、幽世から鎌倉現世に出てきたわけありのあやかしたちを、たくさん救ってきたでしょう？」
吾妻亭で働く面々は、その最たる例だ。
彼らは常盤と出会ったことで、新たな人生と、心安らぐ居場所を得られた。
「私が花嫁になったら、そんな常盤の足を引っ張ってしまうかも……。みんなの大切な居場所である吾妻亭の名を汚すことになるんじゃないかって、ミスをするたびに考えちゃうの」
常盤だけではない。今の紗和にとって吾妻亭とそこで働くあやかしたちは、何物にも代えがたい存在になっていた。
（大切だからこそ、こんなにも不安になるんだ）

常盤に恋をして、彼の求婚を受け、吾妻亭の女将になる決意をしなければ、知り得ない感情だった。
「自分が不甲斐なくて嫌になる。みんなを安心させられるような、立派な花嫁と女将になりたいのに」
そこまで言うと、紗和は下唇を噛みしめた。
情けない。悔しくて、たまらない。
こんなふうに弱音を打ち明けるのは、女将修業を開始してから、初めてのことだった。
女将たるもの、弱音など吐くべきではないと思っていたのだ。
（さすがに、常盤にも呆れられちゃったかも）
不安に不安を重ねながら、紗和は常盤の様子を窺った。
ところが次の瞬間、常盤が妖しい空気をまとっていることに気がつき、ハッとして息を呑んだ。
「と、常盤？」
「……嗚呼。紗和に想われている俺は、この世で一番幸せな男だ」
感慨深げにつぶやいた常盤は、片手で自身の顔を覆っていた。
指の隙間から見えた瞳は紅く濡れていて、紗和の背中を冷たい汗が伝い落ちる。
「紗和が尊い。尊すぎて、可愛くて、愛おしくてたまらない……。今すぐ屋敷に連れ

帰って、二度と俺以外の者の目に触れないように、監禁してしまいたい」
願わくば、空耳であってほしい。
けれど常盤がこうなるのは、珍しいことではなかった。
どうやら紗和は、常盤の重すぎる愛を強く刺激してしまったらしい。
紗和が、どう反応したらいいのか迷っていると、その様子に気づいた常盤が、顔を覆っていた手をパッと離した。
「冗談だよ」
ニッコリと甘い笑みを向けられる。
対する紗和は固まったあと、曖昧な笑みをこぼしてしまった。
（冗談……には、聞こえなかったんだけど？）
「紗和、今の正直な気持ちを話してくれて、ありがとう」
すっかり上機嫌になった常盤は、紗和のほうに体を向けた。
思わず常盤から目をそらせずにいると、ふたたび繋がったままの手に力が込められる。
「稲女たちも言っていたように、紗和は十分頑張っているよ」
秋風に揺らされた髪を、常盤の手が優しく撫でる。
「紗和は俺の唯一の花嫁だし、紗和以外に吾妻亭の女将になれる者などいない」

だから焦らず、紗和は自分のペースで、紗和らしく取り組んでいけばいい。
そう言葉を続けた常盤は、髪を撫でていた手を紗和の頬に滑らせた。
温かくて、大きな手だ。常盤の想いが心の奥に染み込んで、紗和の胸は熱くなった。
「あ、ありがとう」
くすぐったい気持ちになった紗和は、とっさに常盤から目をそらした。
と、そのときだ。紗和は東勝寺橋のすぐそばに建つ、大きな石碑に目を留めた。
「あれって……」
「ん？　ああ。あの石碑には、青砥藤綱の逸話が書かれている」
紗和の視線の先に石碑があることに気づいた常盤が、すぐに説明してくれる。
「藤綱は、鎌倉時代に生きた武士だ」
つぶやいた常盤は、石碑に書かれた文字を静かに見つめた。
〝太平記〟によると、ある晩、青砥藤綱は東勝寺橋の上から滑川に、銭十文を落としてしまったそうだ。
彼はその銭十文を取り戻すために、銭五十文で松明を買って、家来に捜させたのだとか。
「この銭拾いの話は、藤綱の逸話の中でも特に有名なもののひとつらしい」
「そうなんだ」

常盤の説明を聞いた紗和の頭には、ある疑問がよぎった。
「でも、十文を拾うために、五十文の松明を買ったら損だよね？」
たとえば、落とした千円を取り戻すために、新たに五千円を使うのは本末転倒ではないか。
（単純に考えたら、四十文――四千円、損したことになるもんね）
「藤綱の家来も紗和と同じように考えて、藤綱本人に確認したようだ」
「え？」
「だけど藤綱はその家来に、〝十文が川底に沈んだままでは、ただの損だ。だが、その十文のために五十文で松明を買えば、銭が流通して町民や商家が利益を得られる〟と、説いたらしい」
話を聞いた紗和は、目を丸くして固まったあと、「なるほど」と頷いた。
「つまり……ただ十文を失うだけでは損だけど、その十文のために五十文を使うことで、巡り巡ってなんらかの利益が自分にも返ってくるかもしれないってことだよね」
青砥藤綱には先見の明があり、聡明な人であったとよくわかる。
一気に興味が湧いた紗和は、石碑から常盤に視線を戻した。
「他にも、青砥藤綱にまつわる逸話はあるの？」
先ほど常盤は『銭拾いの話は、藤綱の逸話の中でも特に有名なもののひとつ』と言っ

ていた。
　ということは、きっと他にも伝説のような話が残っているに違いない。
　目を輝かせる紗和を見て、常盤はふっと口元を緩めた。
「すまない。藤綱については、銭拾いの話が有名という知識くらいで、あまり詳しく知らないんだ」
「そっか……。じゃあ今度、自分でも調べてみようかな。お客様に聞かれたときに、ちゃんと話せるようにしておきたいし」
　お客様にもっと鎌倉を好きになってもらう、いいきっかけにもなるかもしれない。
　紗和は石碑の前で意気込んだ。常盤はそんな紗和の姿を、まぶしそうに見つめた。
「……やはり、吾妻亭の女将は紗和しかいないな」
「え？　常盤、今なんて言ったの？」
「俺には紗和しかいないと言ったんだよ」
　小さく笑った常盤は身を屈めると、無防備な紗和の額に口づけた。
「な――っ⁉」
　驚いた紗和はとっさに身を引き、目を白黒させながら額に手を当てる。
「こ、こ、こんなところでなにするの⁉」
「なにって、可愛い花嫁を愛でただけだが？」

　悪びれもせずに言われて、紗和の顔はますます赤くなった。
　想いを伝え合ってからというもの、常盤は隙あらばスキンシップをはかろうとする。
　大体はじゃれ合い程度のものだし、紗和も常盤が好きなので、嫌というわけではない。
（でも、外でするのは論外！）
　誰かに見られていたら、どうするつもりだったのか。
　最近の常盤は紗和が注意をしても、今のように開き直るか、『見せつけてやればいい』という態度なのが気になっていた。
「さて、次はどこに――」
「もう、今日は帰りますっ！」
「えっ⁉」
「人目につくところでこういうことをするのはやめてと、いつも言っていますよね？」
　あえて距離のある敬語を選び、ぴしゃりと告げた紗和は、ぷいっと顔をそむけた。
　そして、常盤に背を向けて腕を組む。
　これ以上許したら、さらに常盤はつけ上がるばかりだと踏んだのだ。
（さすがに、そろそろちゃんとしてもらわなきゃ）
　思惑通り、常盤は途端に慌て出し、おろおろしながら紗和の前に回り込んだ。
「さ、紗和、勝手なことをしてすまないっ。あまりに紗和が愛おしくて、我慢できな

かったんだ」

全力で弁明する様子は、整いすぎた容姿に反して可愛らしい。

「もう二度と、紗和が嫌がることはしないと約束するっ！」

傾国の美男が形無しだ。あまりに必死なその様子に、紗和のほうこそ我慢できずに笑ってしまった。

「ふ、ふふ……っ」

「紗和……？　怒っているんじゃないのか？」

「もちろん、怒ってたよ。でも常盤を見てたら、なんだかこれ以上はかわいそうになっちゃった」

これが惚れた弱みという奴なのかもしれない。

そっと目を細めた紗和は、今度は自分から常盤の手を取った。

大きくて、温かい手だ。ときどき今のように腹が立つこともあるけれど、いつだって常盤は紗和を一途に想い、支えている。

「常盤、今日は気分転換に連れ出してくれてありがとう。おかげで、改めてまた今日から頑張ろうって思えたよ」

暗く沈んでいた気持ちが浮上し、自然と笑みまでこぼれていた。

（もう、大丈夫）

心の中で頷いた紗和は、常盤を見つめたまま微笑んだ。

「やっぱり、吾妻亭のことが気になるから今日は帰ろう」

そろそろ、お客様のチェックインの時刻だ。

今日一日、鎌倉観光を楽しんだあやかしたちが、心と体を休めに吾妻亭にやってくる。

真っすぐな紗和の言葉を聞いた常盤は、ふっと笑みをこぼして息を吐いた。

「紗和がそう言うのなら、仕方がない。今日の続きは、また次の楽しみに取っておこう」

そうしてふたりは微笑み合い、手を繋いだまま吾妻亭に戻った。

ところが吾妻亭に着くと、思いもよらない来訪者がふたりを待ち受けていた。

「頼重さん？　どうしたんですか？」

門の前でその男――頼重と出会した紗和は、驚きつつも声をかけた。

「ああ、紗和さん！　それに常盤殿も……ちょうど今、中に入ろうとしていたところだったんです」

そう言って爽やかな笑みを浮かべた頼重は、幽世文部科学省に企画官として勤めるあやかし、八岐大蛇だ。

紗和と頼重が知り合ったのは、あやかし政界のお偉方が吾妻亭で開いた宴会。

酒に弱く、困っていた頼重に紗和が声をかけたことがきっかけで打ち解けた。

（頼重さんと会うのは、あの宴会以来だけど……）

スーツ姿の頼重は、以前会ったときと同じく、いかにもデキる男らしい出で立ちをしている。

正義感にあふれた優しいあやかしということだけでなく、亡き父と同じ浅葱色のオーラをまとっていることもあって、紗和は頼重にかすかな親近感を抱いていた。

「今日ここに来たのは、他でもない紗和さんにお話があって――」

「本日宿泊予定のお客様の中に、頼重殿の名前はないはずですが」

と、言葉を遮り、すかさず一歩前に出たのは常盤だった。

常盤は、頼重は紗和に好意があると踏んでいる。

さらに、紗和も頼重に好印象を持っているのを察した様子で、笑いながら警戒心をあらわにしていた。

（まったくもう）

繋がれている手に力がこもったのを感じた紗和は、常盤の気持ちを見抜いて曖昧な笑みを浮かべる。

「頼重さん、すみません。吾妻亭の中でお話ししましょう」

「紗和……？」

常盤の手を離した紗和が頼重を引き入れると、常盤はどこか不安げに瞳を揺らした。

まるで、捨てられた子犬のような目だ。紗和のことになると、途端に常盤は余裕がなくなってしまう。

「常盤。あなたは小牧さんに、頼重さんがいらしたことを伝えてきてくれる？」

「だが、それでは紗和と頼重殿が、一瞬でもふたりきりに――」

「あなたは吾妻亭の主人です。私は、そんなあなたの花嫁兼、吾妻亭の女将として、訪ねてきてくださった頼重さんをご案内するだけよ」

紗和は、あえてはっきりと通る声で言い切った。

すると常盤だけでなく、頼重も驚いた様子で目を見開いて固まる。

「紗和さん、今のお話は……」

「驚かせてしまって、すみません。じつは、少し前に決めたことなんです。正確には、花嫁も女将も〝そうなる予定〟というだけなんですけど」

こうして改めて説明するのは照れくさい。

それでも紗和は、常盤が自分にしてくれたように、常盤が感じる不安を少しでも取り除いてあげたかった。

「そう、なのですね」

紗和の言葉と想いを感じ取った頼重は、少しだけ残念そうに肩を落としてつぶやいた。

けれどすぐに拳を強く握ると、今度はなにかを確信した目で紗和を見つめる。

「やはり、今日はここに来てよかった。今のお話を聞いて、今回の取り組みには紗和

さんが適任だと改めて感じました」
「取り組み？」
どういうことだろう。頼重の言いたいことの意味がわからず、紗和は聞き返して小首を傾げる。
「じつは紗和さんに、折り入ってお願いがあるのです」
そう言うと頼重は、肩にかけていた鞄の中から、書類のようなものを取り出した。
そしてそれを、紗和に差し出す。
書類は企画書で、表紙には幽世（かくりよ）文部科学省と印字されていた。
「紗和さんには、幽世（かくりよ）にある初等学舎で、現世について教える特別授業を開いてほしいのです」
「と、特別授業？」
「はい。つまり、あやかしの子供たちの先生になっていただきたいということです。僕は、紗和さんならきっと、人とあやかしを繋ぐ架け橋になってくれると思っています」
頼重の話を聞いた紗和は、ぽかんと口を開けて固まってしまった。
（私が、あやかしの子供たちの先生になる？）
寝耳に水とは、まさにこのことだ。思考が追いつかずに隣を見ると、常盤もまた紗和と同じく、鳩が豆鉄砲を食らったような顔で固まっていた。

二泊目　思わぬ依頼とすれ違い

「先生なんて、私には無理です！」
吾妻亭の一室に、紗和の声が響き渡る。
部屋の中には紗和と常盤だけでなく、小牧と阿波、さらには話を聞きつけた稲女まで集まっていた。
「いえ、今回の企画に関して、紗和さん以上の適任者はいません」
きっぱりと断言したのは頼重だ。
六人が囲む座卓の中央には、頼重が用意した企画書が置かれていた。
企画書には、幽世（かくりよ）文部科学省の企画官として彼が推し進める教育事業の詳細が記されている。
「ここにも書かれている通り、今回の事業は、あやかしの子供たちに現世の知識を教えることだけが目的ではないのです」
頼重の手がページをめくる。そこには事業の核となる、〝純血妖〟と〝邪血妖〟の関係が記述されていた。

「皆様もご存じの通り、幽世では純血妖による邪血妖への根深い差別が蔓延っています」

根深い差別――。その言葉に、常盤以外の面々の表情が曇った。

あやかしや神々が住まう幽世では、常盤や阿波のようなふたつ以上の種族の血が混じったあやかしは、邪血妖と呼ばれている。

邪血妖は古くから純粋なあやかし……純血妖から迫害の対象にされてきたのだ。

「ですが、最近になって風向きが変わってきたのです。紗和さんは、蛇族のご令嬢である柚殿をご存じでしょうか」

頼重の口から出たその名を聞いた瞬間、紗和は大きく目を見開いた。

「柚様が、どうかされたんですか⁉」

思わず前のめりになってしまう。

柚はあやかし界でも高貴な一族とされる蛇族の当主の娘で、白蛇令嬢と呼ばれる幽世でも人気のインフルエンサーだ。

数ヶ月前、付き人の翠と共に吾妻亭に泊まりに来て、紗和とは随分親しくなった。

親しくなったきっかけは、紗和が柚と翠の恋を後押ししたこと。

ふたりの恋路を阻んでいたのは主人と侍従という身分差だけではなく、柚が純血妖で翠が邪血妖であるという問題だった。

（ふたりは幽世に帰って、自分たちの結婚が認められるように因習と戦うと言っていたけれど）

その後の便りはなく、紗和はずっとふたりのことを気にかけていた。

「紗和さんは柚殿とお知り合いなのですね」

「はい！　それで……柚様に、なにかあったんですか？」

紗和はふたたび前のめりで尋ねた。

頼重はふっと表情を緩めると、もう一度企画書に視線を落とす。

「蛇族のご令嬢である柚殿は、邪血妖の翠殿との結婚を公表すると同時に、純血妖の邪血妖に対する差別問題に声を上げたのです」

「え……」

柚は自身への厚い信望と自らの発信力を存分に使い、多くのあやかしたちに差別撤廃を訴えかける活動を始めたという。

そしてそれを機に、柚の友人でもある雪女の小雪を筆頭に、幽世でも新しい考えを持つあやかしたちが続々と賛同の声を上げ出した。

「僕も純血妖ではありますが、邪血妖へのくだらない差別をなくしたいと以前から思っていました。でも、なかなか動き出せる機会がなく、今回提案した教育事業は、その改革への大きな一歩になると感じています」

頼重は力強い声で断言した。頼重も、差別撤廃の賛同者のひとりなのだ。
頼重の熱意ある言葉と、自身が背中を押した柚と翠の名前が出たことで、紗和の心はわずかに揺れた。
「紗和さんは、その一歩を担うに相応しい人です」
「ま、待ってください。私があやかしの子供たちの先生をすることが、どうして改革への大きな一歩になるんですか？」
わからないことだらけだ。
問われた頼重は改めて姿勢を正し、真っすぐな目を紗和に向けた。
「僕は幽世の子供たちに、広い視野で物事を考えられるようになってほしいと願っています」
「広い視野で物事を……？」
「はい。根強い因習を、当たり前だと思ってほしくない。外の世界を知り、彼ら自身の目で、なにが正しいのかを見極めてほしいのです」
今、改革のために幽世で声を上げているのは大人たちだ。
だが頼重は、幽世の未来を担う子供たちにこそ、新しい風を吹き込む存在になってほしいと願っていた。
「紗和さんには、そのきっかけになってほしいのです。人でありながら、あやかし専門宿の吾妻亭で働く紗和さんは、まさに新しい風と言えますから」
さらに紗和は邪血妖である常盤の花嫁になる予定で、吾妻亭では純血妖と邪血妖の両方と交流を持っている。
頼重は紗和に、人の目から視たあやかしたちのこと、そして純血妖や邪血妖のこと、現世のことに至るまで――自身がこれまで視て感じてきたことを、あやかしの子供たちに話してほしいと頼んだ。
「紗和さんの言葉は、必ずや子供たちの心に響くはずです。だからどうか、幽世の未来のために力を貸してください！」
そこまで言うと、頼重は深々と頭を下げた。
対する紗和は言葉をなくして俯いてしまう。
（柚様や頼重さんに協力するだけでなく、邪血妖への差別をなくすきっかけのひとつを作れるなら、ぜひ力になりたいけれど）
本当に自分にそんなことができるのかと不安だった。
ただでさえ、今は女将修業で手いっぱいなのだ。並行して、あやかしの子供たちの先生という重役を、務めきれるとは思えない。
「そのように重要な決断を、頼重殿の意向だけで通せるものなのか？」
と、紗和が思い悩んでいたら、それまで黙って話を聞いていた常盤が口を開いた。

「頼重殿が所属している幽世文部科学省の上層部、さらにその周囲には、当然、改革に反対する者もいるはずだ」
常盤は、厳しい目を頼重に向ける。
高い地位についている純血妖ほど、自身の血に誇りを持っている。
そんな彼らは変化を嫌い、改革を推し進めようとする者たちを敵対視するはずだ――というのが、常盤の考えだった。
「後ろ盾が、頼重殿だけでは弱い。紗和の身に危険が及ぶ可能性もあるのではないか？」
「ちょっと常盤、そんな言い方……！」
「紗和さん、いいんです。常盤殿の言う通り、僕だけでは力不足なのは事実ですから」
常盤に問われた頼重はそう言うと、苦笑いをこぼして目を伏せた。
「それにご懸念通り、上層部には〝純血妖至上主義〟で改革に反対している者もいます。ですが、じつを言うと紗和さんを推薦したのは僕だけではありません。幽世でも大きな影響力を持つ政界妖の方も、共に名を挙げてくださったのです」
「大物政界妖からの推薦だと……？」
「はい。その方は、どこからか紗和さんの評判を聞きつけて、紗和さんなら〝幽世の未来を変える礎を築けるだろう〟と仰っていました」
その政界妖とは、一体誰なのだろうか。

（私を知っているなら、お客様として吾妻亭にいらしたことがある方とか？）
首を傾げた紗和の隣で、常盤は眉間のシワを深くした。
「その政界妖は何者なんだ？」
「それは……大変申し訳ありません。その方の許可なく、お名前を申し上げることはできかねます」
信用問題に関わるのだろう。頼重は、すまなそうに頭を下げた。
「そういうわけで、紗和さんを推しているのは僕だけではありません。今お話しした方以外にも、改革派はたくさんいます」
ふたたび顔を上げた頼重は、真剣な眼差しを紗和に向けた。
吾妻亭で働く紗和は新しい風。幽世の未来を変える礎を築ける――
紗和はまさか自分が、誰かにそんなふうに期待を寄せてもらえるとは夢にも思っていなかった。
（私も常盤のように、困っているあやかしたちを救えるかもしれないってことだよね？）
目を閉じれば、これまで吾妻亭で出会ったあやかしたちの姿が脳裏に浮かぶ。
柚や翠、純血妖から差別を受けて、吾妻亭に流れ着いた従業員たち。
もしかしたら、彼らの力になれるかもしれない。膝の上で拳を強く握った紗和は、

閉じたばかりの目を開けた。
（考えてみたら、これは私だけでなく、吾妻亭にとってもいいチャンスなのかも）
実際に改革が成功すれば純血妖たちの冷たい視線も減り、吾妻亭に勤めるわけありのあやかしたちも、今よりもっと働きやすくなるだろう。
さらに紗和が幽世（かくりよ）について知ることは、吾妻亭の女将（おかみ）としてお客様をもてなす際にも、必ず役に立つはずだ。
「紗和さん、どうでしょうか」
緊張した面持ちで頼重が問う。
逡巡していた紗和は深呼吸をすると、覚悟を決めて顔を上げた。
「……わかりました。私でよければ、お引き受けします」
すべては、差別に苦しんでいるあやかしたちのために。
そして、幽世（かくりよ）の未来を担うあやかしの子供たち、吾妻亭と自分自身のためにも、紗和は頼重の頼みを受ける決意を固めた。
「よかった、ありがとうございます！」
紗和の返事を聞いた頼重は、パアッと表情を明るくして満面の笑みを浮かべた。
「でも、先生なんてやったことがないので、不安でいっぱいですが……」
「大丈夫です、僕も全力でサポートさせていただきますので！　それでは早速、詳細

の打ち合わせを――」
「待て。俺は、今回の企画に紗和が参加するのは反対だ」
と、喜ぶ頼重を制するように、低い声で口を挟んだのは常盤だった。
慌てて紗和が隣を見ると、常盤は明らかに不機嫌な空気をまとって目を眇（すが）めている。
「な、なぜ反対なのですか？」
頼重がおそるおそる尋ねた。対する常盤は重い息を吐いて腕を組んだ。
「先ほども言ったように、幽世（かくりよ）での紗和の身の安全に不安がある。人である紗和が思っている以上に、幽世（かくりよ）は危険なところだ」
「もちろん紗和さんに危険が及ばぬよう、万全の態勢で護衛をつけます！」
頼重がすかさず対応策を示す。
けれど常盤は、まったく受け入れるつもりはない様子で眉間のシワをいっそう深くした。
「紗和が特別講師をするために吾妻亭を空（あ）ければ、従業員たちがそのぶんを補わなければならない」
それは常盤の言う通りだ。紗和がちらりと阿波と稲女に視線を向けると、ふたりはなんとも言えない表情をしていた。
「仮に紗和が抜けるとしても、アタシは今日のようにフォローに努めます……けど」

「稲女をはじめ、吾妻亭の仲居たちは優秀です。それに私も、よほどのことがない限り、人員不足にはならないように従業員たちを配置しておりますよ」
ふたりは暗に、紗和の思いと選択を尊重すると言っているのだ。
（本当にありがとうございます……）
心の中で阿波と稲女に感謝を述べた紗和は、改めて常盤に視線を戻した。
「あのね、常盤。私も常盤みたいに――」
「女将修業はどうするんだ？」
「え？」
「両立するのは、今の紗和には難しいだろう」
紗和の言葉を遮った常盤は、今度は苛立ちを滲ませた声で言った。
そして、そのまま目を閉じてしまう。紗和は開いたばかりの唇を、きゅっと引き結んだ。
（常盤は、私を気遣って言ってくれてるんだろうけど……）
今以上に仕事が増えれば、紗和が体調を崩して倒れてしまうのではと、常盤は案じている。
一方で、聞きようによっては、〝紗和には女将業と先生業の両立などできっこない〟と決めつけているようにも思えた。

現に頼重はそう受け取ったようで、やや厳しい顔をして常盤を見やる。
「特別講師は週に一度、一時間のスケジュールでお願いする予定です。紗和さんのご負担が最小限になるよう、十分な配慮もさせていただきます」
週に一度、一時間。それならば都合をつけて、どうにか通うことはできそうだ。
（忙しい曜日と、仕事の多い時間帯を避ければ、吾妻亭のみんなに迷惑をかけずに済みそう）
「頼重さん、護衛だけでなく、スケジュールについてもご配慮いただきありがとうございます。ぜひ一度、企画の詳細を――」
「人である紗和は、我々あやかしよりもか弱く繊細だ。たとえ週に一度、一時間であろうが、慣れない幽世に通うことは大きな負担になる」
紗和が具体的な話に踏み込もうとした途端、またしても常盤が言葉を遮った。
さすがの紗和も虚を突かれ、呆気にとられて固まってしまう。
紗和はつい先ほど、常盤のおかげで改めてこれからも頑張ろうと思わせてもらえたばかりだった。
失くした自信を、もう一度取り戻せそうだったのだ。
それなのに今は、その気持ちごと常盤に否定されているような気がして苦しくなる。
「とにかく、今回の件は断らせていただこう」

「どうして……？　私のことなのに、なんで常盤が勝手に決めるの？」
さすがに黙っていられなくなった紗和は、震える声で常盤に尋ねた。
するとようやく、常盤の目が紗和を捉えた。
紗和の目に怒りと悲しみが滲んでいることに気づいた常盤は、ハッとして息を呑んだ。
「さ、紗和。俺は紗和のことが心配で……」
「わかってる。でも、本当にそれだけ？　常盤は自分の目の届く範囲に、私を置いておきたいだけじゃないの？」
「――っ、」
女将修業は後押ししてくれるのに、紗和が吾妻亭の外に出るのは断固として反対する。
これではまるで、体のいい監禁だ。もちろん監禁は大袈裟でも、常盤はなにかにつけて紗和を囲いたがる発言をするので、あり得なくはない話でもある。
（冗談だって誤魔化したけど、東勝寺橋でも『監禁してしまいたい』って言ってたし）
「私は常盤の許可がないと、吾妻亭から出られないの？　常盤の花嫁は、どんなときでも常盤のご機嫌を伺って、常盤の言う通りにしなきゃいけないの？」
「まさか！　そんなことは望んでいない！」

常盤は焦りながらも、はっきりと否定した。
紗和はほんの少し安堵したが、そこへすかさず、先ほどのお返しとばかりに頼重が口を挟む。
「どうでしょうか。第三者から見ると、常盤殿は紗和さんを自分の思い通りにしたいのではと感じます」
「な……っ！」
「紗和さんは、自らの意志で特別講師を引き受けると仰いました。ですが常盤殿は、自分が紗和さんと離れたくないという思いから、特別講師よりも女将修業を優先すべきだと主張しているように見えるのです」
頼重が恐ろしいほど率直な意見をぶつけた。
図星とはいかないまでも、常盤も思い当たる節があったのか難しい顔をして口を噤む。
「本当に紗和さんを愛しているというのなら、彼女を信じて、彼女がやりたいことを全力で後押しするのが伴侶としての務めでは？」
追い打ちをかけるように堂々たる声が響いた。
部屋の中が静寂に包まれる。軍配がどちらに上がったかは、明らかだった。
「……常盤様の負けね」

重い空気に耐え切れず、ぽそっとつぶやいたのは稲女だ。
頼重に論破された常盤は、しばらく沈黙したのち、なにかを諦めた様子で目を閉じた。
「紗和の好きなようにすればいい」
そして、ゆっくりと立ち上がる。
「常盤……！」
紗和はとっさに引き止めたが、そのまま常盤はひとりで部屋を出ていってしまった。
（どうしよう）
追いかけるべきだろうか。
ところがそんな紗和の迷いを断つように、ふたたび頼重が口を開く。
「紗和さん、すみません。あまりお時間を取らせるのも申し訳ないので、話の続きをしてもよろしいでしょうか」
頼重も忙しい合間を縫って紗和を訪ねてきている。
状況を察した紗和は、常盤のことを気にしながらも、頼重へと視線を戻した。
「は、はい。お願いします」
会釈をすると、頼重が再度企画書のページをめくった。
紗和はそこに書かれた文字を必死に目で追ったが、脳裏（のうり）には部屋を去っていく切なげな背中が焼き付いて離れなかった。

三泊目　いなり寿司と星月夜

「紗和さんに特別講師として来ていただくのは、毎週水曜日の十三時から十四時までとしましょう。ご都合が悪い場合や緊急時はスケジュールを調整しますので、遠慮なく仰（おっしゃ）ってください」
常盤が部屋を出ていったあと、頼重はとてもわかりやすく紗和に企画の詳細を説明した。
それだけでなく、宣言通りにスケジュールも十分な配慮を見せ、紗和や吾妻亭の従業員たちの負担が少なくなるように努めてくれた。
「では、来週の水曜日の昼ごろに迎えに来ます。本日はお時間をいただき、ありがとうございました」
完璧な仕事ぶりを見せた頼重は、爽やかな笑みを浮かべて去っていった。
堂々としていて、自信に満ちあふれた後ろ姿に感心してしまう。
常盤とは正反対だ。去り際に見た常盤の様子を思い出した紗和の心は重くなり、口からは思わずため息がこぼれた。

＊　＊　＊

そうして、頼重が訪ねてきてから約一週間後。いよいよ紗和が幽世（かくりよ）に行く前日である、火曜日の夜を迎えた。

「紗和、いよいよ明日ね」

紗和が一日の仕事を終えて調理場に顔を出したら、稲女に肩を叩かれた。

調理場には稲女だけでなく、義三郎に仙宗、小牧も集まっている。

「皆さん、明日は予定通り昼過ぎに仕事を抜けますが、あとのことはよろしくお願いします」

吾妻亭の従業員たちには、特別講師として週に一度、幽世（かくりよ）に行くことは説明済みだ。

（みんな、快く背中を押してくれて感謝しかないよね）

紗和が改めて頭を下げると、四人は笑顔で頷いた。

「子供たちの相手は大変かもしれんが、嬢ちゃんなら大丈夫だろう」

「親方の言う通り～！　オレもさわっぺの授業、受けたかったな～」

「自分がやると決めたことなんだから、しっかりやってきなさいよ。生意気なガキがいたら、ぴしゃりと叱ってやりなさい」

それぞれが紗和に温かい言葉をかける。

最後に紗和と目が合った小牧は、紗和の思いを察した様子で柔らかい笑みを浮かべた。

「常盤様のことは自分がきちんと目を光らせておきますので、どうかご心配なさらず」

百二十点の気遣いだ。

「ありがとうございます」と答えて微笑んだ紗和は、ふっと手元に視線を落とした。

――この一週間、常盤とはこれまで通りに接してはいるものの、以前に比べたら明らかな距離がある。

互いに相手の顔色を窺（うかが）うような時間が増えて、言葉を交わすたびに、ぎこちなさが残った。

紗和はその空気が息苦しくもあり、少しだけ寂しくも感じていた。

（やっぱり私から、謝ったほうがいいのかな）

話し合いをするべきだと何度も思った。しかし今週はなにかと忙しく、思うように時間が取れなかった。

「それにしても、一体、誰が紗和を推薦したのかしらねぇ」

疑問を口にしたのは稲女だ。我に返った紗和は、ふたたび四人に目を向けた。

「え～、その改革を始めた柚様じゃないんですか？」

「はぁ？　ほんっと、サブはバカね。幽世でも大きな力を持つ政界妖の推薦だって説明してたじゃない」
「そんな人と、さわっぺはいつ知り合ったの？」
「だから、それがわからないって話でしょうが。……あ、もしかして、義三郎のあの怖いお兄さんが推薦したんじゃないの⁉」
稲女の推測は、紗和も考えたことだった。
義三郎の兄の義一郎は烏天狗族の次期当主。政界妖として幽世で活躍しており、吾妻亭にも訪れたことがある。
（でもサブくんのお兄さんは、改革派ではないような気がするんだよね）
以前会ったときは、全力の純血妖至上主義者だった。
吾妻亭に好感を抱いているとも思えないし、紗和の推薦者になるのかは疑問だ。
「あのお兄さん、近々サブにも会いに来るつもりだったりして」
「い、稲女さん、冗談きついっすよ～！」
兄との仲は良好とは言えない義三郎が、目を白黒させながら狼狽えた。
ふたりのやり取りを、仙宗と小牧は呆れながらも穏やかに見守っている。
（ああ、やっぱり吾妻亭は居心地がいいな）
和気あいあいとした、いつもの空気に心が和む。

立ち読みサンプル
はここまで

しかし紗和は明日、吾妻亭のみんながいない幽世に、ひとりで向かわなければならない。
考えたら少しだけ不安がよぎった。
「嬢ちゃん、暗い顔してどうした」
紗和の機微に気づいたのは仙宗だった。
胸の前で手を握りしめた紗和は、静かに震える息を吐く。
「やっぱり……断ったほうがよかったんでしょうか」
「あやかしの子供たちの先生をするって話をか？」
「はい。だって、まだ女将修業中で半人前の私が、幽世の未来を変える礎になるなんて。力不足どころか、分不相応にもほどがあります。常盤の言う通り、今は女将修業に専念するべきだったのかもしれないと思って」
考えれば考えるほど、常盤の言うことが正しかったのではないかと思えてくる。
幽世がどんな場所かもわからないのに、依頼を受けてよかったのだろうか。
「頼重さんは私に期待して声をかけてくれたけど、もしかしたら、あやかしの子供たちに悪い印象を与えてしまう可能性もあるし」
「はぁ～。ほんっとサブだけじゃなく、紗和も大概バカよねぇ！」
「え？」